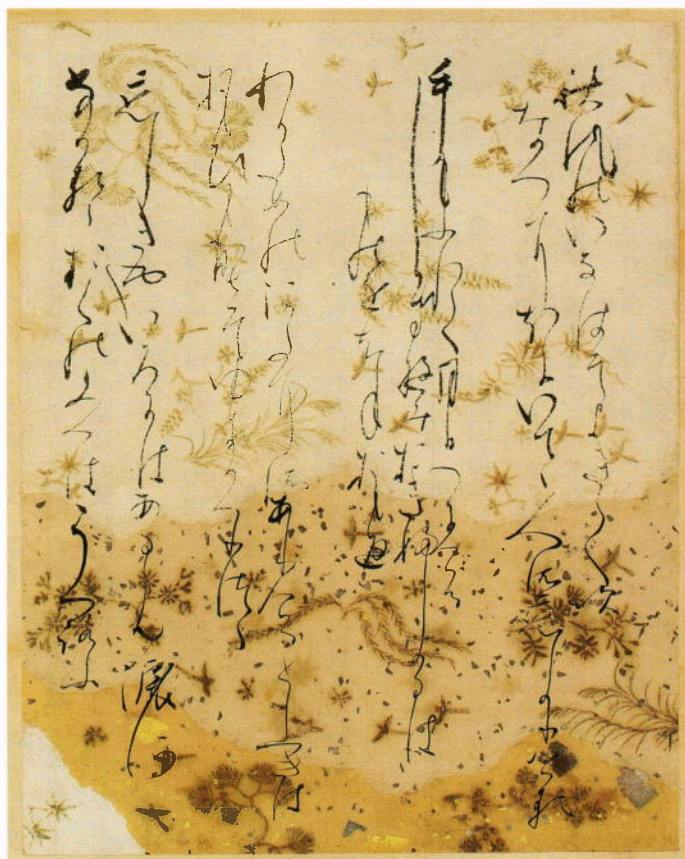


# やまとの名品 天理図書館



つらゆきしゅう いしやまぎれ  
貫之集下断簡(石山切)

藤原定信筆

平安末期写 1幅

縦100.1cm 横48.0cm (本紙 縦20.0cm 横15.9cm)

「男もすなる日記といふものを、女もしてみんとてするなり」との書き出しで始まる、わが国初の仮名書き日記として知られる『土佐日記』。その作者として著名な紀貫之(きつらゆき)(〜九四五)の和歌を集めた家集(かたぐ)が『貫之集』である。



貫之の像「三十六歌仙」より

紀貫之は、最初の勅撰(ていせん)和歌集『古今和歌集』の撰者の一人でもあり、三十六歌仙(かさせん)にも名を連ねる平安時代の代表的歌人。三

十六歌仙とは、藤原公任(ふじわら きんとう)(九六六〜一〇四一)が編んだ、歌合形式の歌集『三十六人撰』に選ばれた、平安中期迄の優れた歌人三十六人の事。

掲出は、西本願寺本『三十六人集』(国宝)のうち、昭和四年に『伊勢集』と共に分割された『貫之集下』の古筆切(断簡)。

掛軸仕立てになっており、本紙は、金銀泥(きんぎんぬい)で小鳥・折枝・紅葉・秋草等の下画(しもゑ)が描かれた金銀箔散(ぎんぎよく)や雲母摺(きりぎりす)の唐紙(からかみ)四種を、破継(やぶつぎ)の技法で継ぎ合せた、極めて美しい一葉である。

和歌部分は平安末期の官人(くわんにん)で、能書家(のうしや)として知られる藤原定信(ふじのらぢのぶ)(一〇八八〜)の筆。

『三十六人集』は、三十六歌仙の家集を集めたもので、西本願寺本は、その最も古く、最も美しい伝本。平安末期の天永三(一一一二)年、白河上皇六十

御賀(おんが)(祝賀の儀)の際、上皇から鳥羽天皇への贈り物として作られたとされるが、その後四世紀以上の時を経て、戦国時代の天文十八(一五四九)年、後奈良天皇から本願寺に下賜(かした)された。下賜(せうた)当時本願寺が、摂津(せつ)国・石山の地(現在の大阪市中央区、大阪城の辺り)にあった為、後に分割された『伊勢集』と『貫之集下』の古筆切は、共に「石山切」と呼ばれている。

(天理図書館 岡本千佳)